

39 我が街 船橋を歩く 船橋の魅力(10) 伝統文化(3) 一大仏追善供養

29期 仲田 元昭

伝統行事の第二弾、毎年2月28日不動院前で地元の小学生も参加し行われる、200年程続いている市指定無形民俗文化財の「大仏追善供養」についてご案内します。

「大仏追善供養の由来」

この石造釈迦如来坐像は、280年程前 延享3年(1746)の津波で溺死したと言われている人々の供養のため地元の方の寄付で造立されました。台座には114名(内28名漁師)の溺死された方の戒名が刻まれています。

その後、漁場の境界をめぐる争い中に、船橋の漁師が一橋徳川家(徳川御三卿:田安家・一橋家・清水家)の幟を立てた船に乗っていたお侍を殴打したため、漁師総代3人が入牢され、1名は牢死、1名は牢を出て間もなく死亡という事件が200年程前、文政7年(1824)にあり、先の津波で溺死された方々の霊とともに翌年文政8年(1825)より毎年供養が行はれるようになりました。

「大仏追善供養の内容」

神楽は神事で執り行われますが、大仏追善供養は仏事で執り行われます。担当寺院は、ここ船橋の寺町にあります3宗派の代表の寺院(真言宗:覚王寺、浄土宗:浄勝寺、日蓮宗:行法寺)が、毎年持ち回りで大仏追善供養を担当します。

供養に入る前に、釈迦如来坐像を綺麗に洗ってから供養に入ります。担当住職が津波で溺死した地元114名と一橋徳川家殴打事件で死亡した2名の漁師総代(内海仁右衛門と岩田団次郎)の供養の読経が始まります。

読経の後に、綺麗に洗った大仏に白米のご飯を盛り上げるように付けます。これは、牢内で食が乏しかった苦労をなぐさめるためといわれています。大仏に盛り付けられたご飯を食べると1年間病気にかからないとの言い伝えがあります。

(参考図書:船橋の地名を歩く、船橋地名研究会資料、石碑他)

「40 我が街 船橋を歩く 船橋の魅力(11)に続く」「2024-2-1 寄稿」



追善供養が始まりご住職の読経中



大仏に白米を盛り付けている行事



盛り付けられた白米を参加者が持ち帰った後